

情報技術の匠

PROFESSIONAL

第58回

IT アーキテクトの匠^{たくみ}

背伸び、あきらめないで。

「1つのことに長い時間をかけて悩んでられない性格。悩んでもせいぜい一晩。それも今までの人生で2、3回ぐらいです（笑）」

ストレスとの付き合い方は、倉島流に解説すると大きく2種類に分かれる。少しのストレスで動きだせる人、強いストレスがかかることで動きだせる人。

「わたしは後者。夏休みの宿題はやはり最終日での追い込み（笑）。だからすぐ目の前でやらなければならないことがあった方がいいんです」

ストレス、という言葉、状態を肯定的にとらえると違った世界が見えてくる。



働く女性にとって出産、産休・育休、そして復職という道のりは平坦なものではない。倉島はワーキング・マザーの先輩として、出産を迎えたり、育児をしながら働く女性を対象にした支援セミナーなどで話す機会も多く、その不安や焦燥を痛いほど感じている。

「いつになったらこの生活が終わるのか、わたし自身、それが分からなくて不安でした。先輩として今はここしか見えないけれど、この先、実はこうなれるんだよ、というのを教えてあげたいんです」

倉島は、自身の体験を通じて、

ワーキング・マザーのフェーズを産休期、1期、2期という分け方で紹介している。

「まず産休・育休中は100%子育て。復職したばかりの1期は生活の半分以上を子どもとの時間が占める。ある程度子どもが育ち、保育園の送り迎えなどがなくなって、時間的な縛りが緩くなるころが第2期です」

それぞれのフェーズで悩みが変わり、心構えも変わっていく。そこで共通するのは「割り切る力」。

「仕事から離れるととても不安です。でも、わたしたち経験者の共通の意見としては、その間に充電したり、自分を客観的に見ることができて人生においてプラスでもある。語学や試験を受けるための勉強、趣味など、普段できないことに取り組むチャンスでもあるんですね」

復職した1期のワーク・ライフ・バランスにおける悩みは「時間の制約」。子どものお迎えのために保育園に夕方6時30分必着。

「5時半にはすべてを振り切って帰らなければいけません。打ち合わせが夕方から始まると、参加できないことが残念で仕方がない。でも、子どもたちにとっては母としての自分がいなければと言いつつ聞か

倉島 菜つ美 (くらしま なつみ)

日本アイ・ビー・エム株式会社
GBS 事業、システムズ・エンジニアリング担当
エグゼクティブ・アーキテクト

[プロフィール]

入社後、金融機関向け資金決済アプリケーション・パッケージの開発・テストを経て、アプリケーション・アーキテクトとして、金融機関向けのサービス・デリバリーに長くかかわる。2005年にクロス・セクターのデリバリー部門へ異動、流通業などに活動の場を広げる。2010年から共同基幹システム構築の大規模プロジェクトにアプリケーション開発グループのリーダーとして参画しつつ、2011年よりシステムズ・エンジニアリング推進部門のマネージャーに就任。一方で、各種研修コースの講師を担当。ワーキング・マザーのための講演なども精力的に行っている。

せて…」

時間の制約の中で向上心を持つ女性たちはジレンマを抱える。だからこそ制約の中でもいかにパフォーマンスを上げられるかを考える。

「結局、お客様に自分を欲しいと言ってもらえるかどうか。時間の制約がなくてもダラダラとやってしまえば評価はされないわけですから」

制約を補ってなお余りあるバリューを築けるか。そしてフェーズは2期へ。

「それまで時間になればすべてを振り切って帰っていたのが、少しなら許される状況に変わってきました。それがいき過ぎて、毎日夜8時9時になって…。頑張っている仕事をしようと思うと結構できる。そうするとそのしわ寄せは子どもたちに。さすがに小学生の子どもがいるのにこれはどうだろうと反省しました」

与えられた制約から自身で設定する制約へ。この時にどう向き合うかがワーキング・マザー第2期の悩み。しかし、いろいろな悩みはあるけれど、振り返ってみれば、成長のためのよい経験だった。

「女性だからといってあきらめるのはもったいない。背伸びは必要。でも頑張り過ぎないこと」



背伸びをするけど頑張り過ぎない。割り切るけれどあきらめない。これは女性に限らず、仕事に取り組む上で重要なメッセージ。倉島が、背伸び、つまり自分自身のバ

リューを高めるために現在取り組んでいるのは、「要件を見だし可視化する」ということ。

「われわれが定義したシステムが、お客様が本当に欲しいシステムの姿と一致するとは限りません。懸命にいろいろな機能を付けたいけれど、不要だったり使い勝手が悪いと言われてしまうこともあります。それは、われわれIT側とおお客様の業務を担当されている方の間で、しっかりした会話が成立していないことが原因と考えられます」

お客様に会っても、ITの方、業務部門の方で使う用語がそれぞれ違う。テクノロジーから発想する言葉とその裏にある思い。お客様が業務から発想する言葉とその裏にある思い。その思いの違いを理解していない情報を基にしてシステムを構築した結果の回り道。

「その仲介、橋渡し。それがわたしの今取り組みたいこと。システム全体をとらえてお客様とお話しする立場ですので、業務の方、ITのメンバー、どちらも分かるような表現をすることで、プロジェクトにおいて皆さんが苦勞せずに円滑に動くようにできればと思っています」

もともと、言葉をつづるのが好きだった。思いを形にして伝えるのが好きだった。

「小学生のころ、先生に作文を褒められました。単純ですけどそこから作文を通じて表現するのが大好きになって（笑）」

文系に思える資質だが一方で大学への進学で選んだのは理系。

「きっちりと答えがあったり、構造化されていることが好きです。すべてのモノには構造があると思う。その点はアーキテクト思考ですね。もやもやしているモノを、絵にして整理して、『こうでしょ』とスッキリさせることが気持ちいいんです」

いろんな人の思いがある。文化が違う、立場が違う。その気持ちを理解すること、共感することは難しい。その裏にあることを明確にする。言葉という表現で、構造を明確にするモデルで。そこに、理解と共感が生まれる。それが倉島のやりがい。

ITのプロフェッショナルの思いとお客様業務の成功を自分の言葉やモデルでよりよい形で結び付ける喜び。アーキテクトの本質は、お客様にITの価値をお届けすること。自分が少年のように目を輝かせてテクノロジーを語るエンジニアではないからこそ、彼らの思いをお客様業務の成功に結び付ける役割を担える。

「モデリングと出会って、そこに自分のバリューがあると思い、得意分野にしてから、自分がアーキテクトと名乗ってもよいかなと思えるようになりました」

産休・育休、ワーキング・マザー1期、2期、ストレスはあるけれど自分を動かすためのエネルギーでもあった。橋渡し役はつらいこともあったけれど、それも自分の得意分野を生かせる喜びと、充実したキャリアのためのスイッチ。ハードルが高いほど自分の長所を楽しく、伸ばしていくのだろう。軽やかに。